

---

# たとえばこんな人魚異伝

まめご

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

たとえばこんな人魚異伝

### 【Nコード】

N1857T

### 【作者名】

まめご

### 【あらすじ】

海神ポセイダンの末娘アリーアは好奇心が人一倍旺盛。嵐の夜に助けた王子イワンに一目ぼれしてからは、魔女の協力を得てお城に押し掛ける。予想斜め上を爆走するアリーアのおかげで今日もお城は大騒ぎ。そこに隣国から嫁いできた王女ジェシカは、お顔がちよっと残念なぽっちゃりさん（誇大広告）。イワンが選ぶのは、ヘンタイorブサイク、さあどっち！？ t i n a m i 同時掲載。

## プロローグ

海面から光の柱が差ししている。太いの、細いの、何本も。

アーリアはそれらを数えようとして止めた。今は神妙にしていなければならぬ。

「まったく信じられない」

威嚇するような腹の底からの声を出した男人魚のハロルドは、視線だけで殺せます、くらいの冷めた目線でこちらを睨んだ。連動するように下半身の尾が海底の砂を払う。その横で申し訳なさそうに佇んでいるウミガメの親子が目を瞬<sup>しばた</sup>かせた。

アーリアは黙って首をすくめる。まさか、ばれるとは思ってなかったのだ。こいつらが余計な事をしなければ。

「海流は危険だとあれほど言い聞かせておいたのに、帰れなくなったらどうするんです！」

「あら、そのスリルが楽しいのに」

うっかり言ってしまったから、アーリアは慌てて口に手を当てた。

ハロルドのこめかみに筋が浮かんだ。

近づいてはいけない、と言い含められている東の海流で疑似ジェットコースターを満喫していたアーリアは、目の前にいるウミガメ親子に通報されて宮殿に連れ戻された。お目付役のハロルドは大層おかんむりでかれこれ三時間も説教を食らっている。まあ、怒られるのは毎日なのだけど。

「あのおう、わしらはそろそろこれで……」

ウミガメ（大）が小さく手を上げた。タイミングを一生懸命見計らっていたらしい。

「ああ、お手柄だった。王も感謝されている事だろう。旅の無事を祈る」

一礼して下がったウミガメ親子だったが、ウミガメ（小）が振り返った。

「姫さん、姫さんの泳ぎ、すごかったね！　おいらも大きくなった  
らあんな風に泳げる？」

「勿論よ。あんたはいつかこの海一番の泳ぎ手になるわ」

へへっとウミガメ（小）が笑った。うふふ、とアーリアも笑った。  
そのまま何気なく彼らと一緒に去ろうとしたが、ハロルドに尾っぽ  
を掴まれて未遂に終わった。

「駄目ですよ、姫さま」

「あああゝ……」

ウミガメ（小）が小さな手足を動かして泳いでゆく姿が遠ざかるの  
を、アーリアは涙を堪えて見送った。

「もう！　あたしは無事だったんだからいいでしょ！」

ハロルドは両手でこめかみを揉んだ。

ぶんむくれて横を向いているアーリアは、海王ポセイドンの娘たち  
の中でも群を抜いて美しかった。海底の中でも燃えるように紅い髪  
は、見るものを誘惑するようにそよぐ。瞳は光を湛えて蒼く輝き、  
すらりとした白い肢体に豊満な胸が二片の貝殻に押し込められてい  
る。何より下半身を覆うエメラルド色の鱗は溜息を誘うほど美しい。  
だが王と五人の姉妹たちが寄ってたかって甘やかした為、大層なお  
転婆娘に成長した。サメをけしかけて追いかけて楽しむ。イワ  
シの群れに飛び込んで攪乱する。海面すれすれを泳いで漁師をから  
かう。そして逃げ足の早さは天下一品。

今もハロルドが頭を抱えている間にさっさと逃亡した。

「どこへ行かれるのです！？」

小さくなってゆく人魚姫に怒鳴ると、アーリアも怒鳴り返した。

「お姉さまたちに陸の話聞きに行くの！」

それからくるとターンして、嬉しそうにふんぞり返る。

「あたし、今日で16になるのよ！」

「陸にともる小さな灯<sup>あかり</sup>たちはとてもきれいで幻想的なよ」

「きれいといえはお月さまよ。海中<sup>こゝろ</sup>から見るよりくつきりしていて、

辺りを暖かな光で包み込んでいるの」

海王ポセイドンの宮殿の一室。海草のカーテンに所々縁取られた真珠、珊瑚の絨毯、丸みを帯びた手触りの良い大石にそれぞれ思い通りに腰かけたり、寝そべったりして人魚姫たちはおしゃべりに興じていた。

アーリアはうつとりと姉姫たちの話に耳を傾けている。

「なんて素敵……」

「あなたは好奇心が本当に旺盛なんだから」

姉姫の一人がクスクス笑いながら、アーリアの赤毛を梳いた。

「でも、これだけは守りなさい。人間に関わっては駄目よ」

「そうそう、そんなことをすると、後でこわい事になるんだから」

「はい、お姉さま方」

神妙にアーリアは頷く。

「人間には絶対に関わりません。それが海と陸の掟なのでしょう？」

月が静かに海原を照らす深夜。

アーリアはやる心を抑えつけて、海面を目指す。

そこに存在するもう一つの世界を垣間見る為に。

## 嵐を呼ぶ男

月明かりがたゆむ波を照らす中、アーリアは海面からぽっこりと頭を覗かせた。

「わあ……」

遠くに光の小さな玉が密集しているところが陸なのだろう。はじめてみるそれは、とても幻想的だった。そして、近くには大きな船が一隻、ゆるやかな波間を漂っている。

しばし悩んだ挙句、アーリアは船に向かって泳いでいった。

王子が仕上げのジャケットを羽織ると、両側から声が上がった。

「ああ、イワン様、とってもお似合いです！」

「ほんまですわ、性格の悪さをよう隠してはる」

肩の金の鎖がささやかに揺れて、瞳と同じ漆黒のジャケットに縁取られた金の刺繍が蝋燭の明かりを受けて華やかに輝く。袖口から覗く白いレースは繊細に美しく、職人が魂を込めて制作したものだと思われる。緩やかにウェーブのかかっている黒髪は、今日はぴしりと撫でつけられ、後ろで一括りにされていた。肩から流れる深紅のマントは、ゆるぎない気品を添えている。

その右側で片ひざを付いて両手をヒラヒラと振っているのが女剣士のリンジー。某RPGの剣士のような「どこ防御してるんですか？」というくらいの露出度激しい鎧を身に纏っている。その姿、セクシー&グラマーというよりは、ごつい&逞しい。ぶっちゃけ、オカマのようでもある。

左側で同じく片ひざを付いて手をヒラヒラさせているのは道化師ジヤック。身長120cmほどの小人症の男で、赤と白の縞々の服に、とんがり帽子をちょこんと被っている。

船の一室、臣下二人の絶賛(?)を浴びながら王子はけったくそ悪そうに呟いた。

「お前ら、どこの国の、いつの時代の人間だ」

「なにはともあれ17歳のお誕生日、おめでとうございます」

「憎まれっ子世にはばかると申しますからなあ。イワン様はせいぜい長生きしまっしゃろ。せいながのっぽなだけに、なんちゃって」ひゅう、と小型のブリザードが室内に吹き荒れた後、イワンはジャックの両頬をうにょんと伸ばした。

「その下らない口を縫って、簀巻きにして海に放り投げてやろうか？ ん？」

「アウチ！ マイロード！」

「イワン様。お時間でございますわよ」

いつも見慣れている光景なのだろう、リンジーは二人に頓着せずに甲板に続いている扉を開けた。音楽隊がファンファーレを鳴らし、着飾った人々がわあっと声を上げる。

イワンは道化師の腫れた頬から手を離すと、マントを翻して歩き出した。ほんのりと笑みを浮かべた完全外向型の顔をして。元来が男前な達である。ご婦人方からきゃーと黄色い声援が飛んだ。彼女らだけではない。甲板までクライミングしたアーリアは、颯爽と登場した見目麗しい王子に一瞬で心奪われた。

「なんて素敵なお方……」

思わず手すりを離して両手に当ててしまった為、ぽちゃんと海に落ちたが、再び猛スピードで船によじ上った。恐るべき恋の力である。甲板では祝福の声と共にグラスが掲げられ、同時に夜空に花火が打ち上げられた。人々の感嘆の声が上がる。その片隅でお付き二人が安堵のため息を漏らした。

「降らなくてよかったわねえ」

「全くや、雨男のイワン様の事やから、どうなるか思うとったけど。お月さんもきれいにでてはるわ」

ところがその会話が終わるや否や、暗雲が月を消した。水滴がぽつぽつと降り始める。ぐらりぐらりと甲板も大きく揺れ始めた。

「ああ、いわんこっちゃない、イワン様だけに」

「やかましい」

ジャックの尻を蹴りあげると、イワンはテキパキと指示を出した。

「波が高くなってきた、船長に急ぎ港へ戻るように伝える。皆は船室へ、ここにいては海に落ちてしまう」

船が大波間に乗り上げ、数人が転げた。あちらこちらで悲鳴が上が  
る。ガラスの割れる音、船が傾ぐ<sup>かし</sup>度に右へ左へと滑る料理満載のテ  
ーブル（with太ったコック長）、腰を抜かして手すりにしがみ  
ついているご婦人方には容赦なく波が頭から襲いかかった。流行の  
ヘアスタイルも、最新のドレスもすべてパーである。足元不如意な  
まま必死に彼らを誘導し、甲板に誰もいなくなったと安心した瞬間、  
イワンはふと無重力を味わった。

あ、と思った時には波間に叩きつけられた。

「きゃあああ！」

悲鳴を上げて追いかけようとするリンジーをジャックが慌てて止め  
る。

「イワン様が死んでしまうわ、イワン様が死んでしまうわ！ 早く  
お助けしないと！」

「無理やて、あんさんも死んでまうて！」

「今、死んでしまった方がましよ、職務怠慢よ、王様に殺されてし  
まうわー！ー！」

パニックになっているリンジーは、遙か下にいる道化師の胸ぐら引  
っ掴んで、やけにきっぱりカミングアウトした。

「わたし、権力には弱いんです」

「う、うん、まあ、そりゃ……誰だって弱いわな」

ジャックは薄れゆく意識の中で、ふと思った。

あの人、雨男だけやのうて、嵐まで呼ばはったわ……。嵐を呼ぶ男、  
なんちゃって。

そのまま酸欠状態で気絶した。

パニックになっているのは彼女だけではなかった。狭い室内、大混  
乱である。なんとってアップダウンが激しい上に、熱気包まれ酸素



が薄い。リバースする人、もらう人、神に祈る人、やけになって踊りだす人、思い残すのは嫌だとドサクサに紛れて愛の告白をする人、死ぬのならば君と共に、己の楽器をしかと抱きかかえる音楽隊。イワン様カムバックとヒステリー状態で泣き叫ぶ婦人方。そんな人々を乗せたまま、船は波間に翻弄されながら、港へと向かっていた。

その頃、アーリアは必死になって気を失っている王子を追いかけていた。手を伸ばそうとすれば波に阻まれる。ようやくつかんだと思ったら、その重さにつられて一緒に沈んだ。

「ぎゃー！ 非力！」

人一人がこんなに重いとは思わなかった。自分だけなら、このうねる大波を楽しみながら遊ぶくらいの余裕があるのに。

人間は水中では息が出来ない生き物だと聞いた。だから、絶えず海面から顔を出してなければならぬのだが、それが何より大変だった。

油断するとイワンはすぐに沈んでしまう。慌てて引き上げる。繰り返している内に体力を激しく消耗してしまい、アーリアはくらくらしてきた。

いいえ、負けてなるものか。目覚めよ愛の力！ どすこい！

渾身の力で浮上する。

「人間には関わってはいけない」という掟はすっかり頭の中から消えていた。そこにいるのは、ただ恋する男を助けたいがための一人の少女だった。

王子を抱えてアーリアは必死に泳ぐ。浜辺に辿り着いた時にはすでに朝日が昇っていた。

## 渚の人魚姫

浜辺に着いた頃には、朝日は昇り、昨夜の嵐は嘘のように風いいた。

砂浜に王子を横たえると、アーリアはそのまま力尽きて倒れた。下敷きになった王子が「げふっ！」と悲鳴を上げて水を吐きだしたが、意識はまだ戻らない。

ああ、良かった。生きている。

気を失っているイワンの胸に頬を寄せて、アーリアは心底安堵した。トクン、トクンと聞こえてくる鼓動は確かに生きている証で、正確なりズムを刻んでいる。寄せては返す波の音と共に、それらはとても優しく聞こえた。

アーリアは目を閉じて浸っていたが、むくりと起き上がった。

そこにある無防備な男をしげしげと眺める。見れば見るほど、不思議な生き物だ。尾がなくて足が二本ある。体中に布を着こんでいる。なんでこんなものを。変なの。

しばらくアーリアは好奇心の赴くまま男の両脚をもって重さを確かめたり、顔に張り付いた髪をかき上げてその顔をじっくり鑑賞したり、胸元はだけて素肌を触ったりと遊んでいたが、その内、手がベルトに伸びた。股の間に何か付いているのを発見したのである。

静かな浜辺に呑気なアーリアの鼻歌が響いた。

まどろんでいた意識は少しずつ覚醒してきている。誰かの指が優しく頬に張り付いていた髪を取ってくれた。

誰……？

シャツのボタンをはずされて、呼吸が楽になった。そして絶え間なく聞こえる美しい歌が心地よく耳に響く。うっすら目を開けると、丁度ズボンのベルトが外される所だった。何事、と思う間もなく、フンフンと楽しそうに歌う見知らぬ女は間髪いれずにズボンを引き

下ろそうとした。

「ぎゃあああああー!!」

意識は一気に覚醒した。飛び起けると、女は弾かれたように手を離し、そのままものすごい速さで波間に消えた。

何だ、今のは。

混乱するイワンが分かったのは、誰か女に助けられ、その女にあやうく犯されそうになったことだ。

俺のサムシングの危機だった……!

城中で散々浮名を流してきた王子だったが、好みでない娘は徹底的に相手しない確固たるポリシーがある。そんなのは将来の妃となる、どこかの国の王女でたくさんだ。

一人ブルブルガタガタと震えていたイワンを探しに来た、リンジーとジャックが発見した。

「イワン様ー!」

怒涛の勢いで走り寄った二人は、さっきまで気絶していた主にタツクルかますように抱きついた。

「どふっ!」

イワン、本日三度目の悲鳴を上げる。

「ああ、ご無事で良かった、良かった。もうリンジーは生きた心地がしませんでした! 首一枚で繋がって本当に良かった……!」

「し、し、死ぬ、死ぬ……!」

逞しい腕に力一杯に抱きしめられ、イワンがもがきながら呻く横で、ジャックが袖を濡らす。

「もうなあ……ほんまにあかん思うててん。王子さん死んだら、うちらかて手討ちや。ほんまに運の強いお方やなあ……。ウン〇ちゃうで、ウンやで」

「黙れ、この瞬間冷凍芸人!」

リンジーを剥がしたイワンが、ジャックの頭上に手刀を落とした。

「帰るぞ……お前ら、泣きやめ! そして貼り付くな!! ったくどこまでも自分本位なやつらめ……!」

泣き継るお付き二人を腰と足にしがみ付かせたまま、王子は砂浜を歩きだした。その先には優美にそびえ立つ城が見える。

アーリアは海間の岩から小さな溜息を洩らしながら、その光景を眺めていた。

## 闇に歌えば

「最近、あなたおかしいわよ？」

「どうしたのかしら、溜息ばかり」

平たい岩が円形状に置かれた室内でぼんやりそよぐ海草を眺めていたアーリアは、はっと顔を上げた。5人の姉たちが心配そうにアーリアを見つめている。

人魚姫たちは今日も海面からうらかな光の柱が差し込む宮殿の一室で思い思いの格好でおしゃべりに興じている所だった。

「何でもありません、お姉様方」

微笑む顔も弱々しい。

「うそよ、この間のお父様もお誕生会でも、ダンスの一つも踊らなかったじゃない」

「いつもは鯛や平目を従えて見事に舞踊るのに」

「隅っこの方でずっと昆布をかじっているだけ」

「ねえ、やっぱり変よ。本当にどうしたの？」

姉たちの追求の声にアーリアは曖昧に微笑む。

「わたしたちに言えないことなの？」

本当は大声で叫びたかった。

お姉様、お姉様。あたし、人間の王子様に恋をしてしまいました。

そんなこと、言えない。

あの方を思うと、夜も眠れないんです。胸が苦しくて、切なくて堪らないんです。勝手に涙が溢れてくるんです。お腹が空いて、食欲が無限大に広がるんです（あ、これはいつものことでした）。

「……陸の上が、あまりにも違う世界だったので、未だに驚いてい

るの……」

「なあんだ、そうだったのね」

姉たちは素直に納得した。わたしたちの可愛い妹はなんて純粋なんだろう、とおしなべて相好を崩す。

そこへ、年老いた赤カニがトコトコとやってきた。

「あら、セバスチャン。どうしたの？」

「この間のお父様のお誕生会、見事な活躍だったわね」

「あなたの引退も花を飾れて良かったわね」

「ありがとうございます、姫様方。これより諸海を回ろうと思いましてな」

赤カニのセバスチャンは丁寧にお辞儀をした。宮廷音楽隊隊長であった彼は、今は旅装束を身につけ、背負っている木の枝の先には唐草模様の風呂敷。その頭に頂くのは被り笠。しぶい。北風小僧の寒太郎か。

「取りあえずは西に参ろうと思うておりますじゃ。それでは姫様方、お達者で」

ちやっと笠を上げて挨拶すると、セバスチャンは人魚姫たちの別れの言葉を背に聞きながら去って行った。

西。

その言葉はアーリアのぼんやりした頭の中に、鮮明に入ってきた。西には魔女がいる。

海面から差し込む光が儚げに消える頃、二匹の人魚が西へ猛進している姿があった。

「駄目です、姫様！ お待ちください！」

「待ってって言われて待つ馬鹿はいないわよ！」

アーリアとハロルドだった。とにかくアーリアはカジキも真っ青なスピードで泳ぐ。ハロルドも全速力で追いかける。途中、セバスチ

ヤンがその勢いに流されていった。  
気が付けば、ハロルドは洞窟の奥にいた。大釜がくつくつと煮えたぎっているうす暗い不気味な部屋に。

「たのもー!」

「なんじゃい、騒々しい」

アーリアが張りあげた声に、のっそりと巨大な蛸が出てきた。いや、蛸の足を持った魔女だ。その顔はぼつてりと丸い厚化粧の女で、上半身はつつけば破裂するのではないかと思われるほど贅肉がのっかっている。動くたびに、ゆるるんゆるるんと波打った。

ハロルドの背に冷や汗が流れた。

何をしようとしている、この天然ド級の馬鹿娘……!

「なんの用だね。ポセイドンの娘、アーリアよ」

蛸足の老女はウケケケケと嬉しそうに笑った。

「水晶玉で見物させてもらったから、分かっているのだけだね。」

さあ、お前さんの望みを言うてごらん」

「あたし、人間になりたいの。そして陸に行きたいのよ」

「なんてことを、姫様!」

ハロルドはもはや卒倒しそうだ。

「たやすい御用じゃ。しかし、無料タダというわけにはいかん。そうさな、お前の……」

値踏みするように魔女はアーリアを尻尾の先から頭まで眺める。

「声はいらんぞ。音痴なぞなんの役にも立たん」

「まあ、変ね。設定じゃあたしは美声なはずなのに」

首を傾げたアーリアだったが、次の瞬間、後ろにいたハロルドをずいっと前に突き出した。

「じゃあ、この男で!」

「よし、乗った!」

魔女が膝(足?)を打った。

「姫様 ああああ!」

「ありがとう、ハロルド。いつも小うるさくて仕方なかったけど、

こんな所で役に立ってこれて。あなたもあたしの為なら喜んで犠牲になってくれるわよね」

「誰がなるか！ 一体どこまで自分本位なんですか、あなたは！」

「よく言うわよ。あなたがあちらこちらでナンパしまくっているのは知っているんだから。乙女連合会からも苦情がきているのよ。まあ一つ、年上女に可愛がられるのも悪くはないわよ、ね？」

「年上いっても上限があるでしょう！　すでに限界突破していますよ！」

「ほっほっ、苦しゅうない、ちこう寄れ」

蛸足に絡め取られ、ハロルドは血の涙を流した。

「この小瓶をやろう。陸近くになったら飲むがいい。ただし、足は歩くたびに猛烈に痛むからな」

「構わないわ」

人間になれるのだったら、なんでもいい。

「それから、もう一つ。お前の正体を知られてはいけないよ。そうなればもうワシでも、どうしようもできない」

アーリアは深く頷いて、礼を言った。凶らずも若い男を手に入れた魔女はもうそちらに夢中だ。

ほくほくと小瓶を抱えて、アーリアは洞窟を出た。

「あーーーーー！」

そして背後から聞こえたハロルドの絶叫に少しだけ涙した。

——さようなら、ハロルド。あなたの事はいつまでも忘れないわ。





## 会いたかった

「待てよ、こらあゝ」

「うふふ、捕まえてごらんなさあいゝ」

浜辺で男と女が追いかけっこを楽しんでいる。

イワンはほんやりと、その様子を城のバルコニーから眺めていた。

他人ならば、特に気にも留めない。ああ馬鹿がいる、と鼻で笑うだけだ。

それがこんなに薄ら寒い気持ちになるには、あれがまぎれもなく自分の父と母だからだ！

つい力んだのか、手にしていたグラスにビキッとヒビが入った。

王家のプライベートビーチは今日もうららかで、王と王妃は、今日も臆面もなくいちやこき合っている。

「ほおら、捕まえた！」

「きやあ」

ああ、目も当てられない。

イワンは掛けていた椅子の背にもたれ、空を仰いだ。朝食の後をメイドたちが片付け、横では弟のジークが静かに本を読んでいる。兄弟間は薄い。兄は弟に興味がないし、弟は誰にも心を開かない。

家族で取る朝食など、本当は嫌で嫌で仕方がない。だが、苦痛で仕方なくても、抵抗するより黙って従う方をイワンは選ぶ。無駄な労力は極力使わないと決めている。

立ちあがったイワンを、ジークはちらりと目を上げたが、すぐに本に落とした。

空気のように付いてきた女剣士のリンジーと道化師のジャックを従えて、イワンはのどかな浜辺を歩きだした。

「どちらに行かれます？」

「散歩だ」

白い砂浜は、あの時の事を思い出させる。

赤毛のあの女。気絶しているイワンのズボンをずり下げようとし、悲鳴を上げたら海に逃げた。

幻想だったのか。

いや、確かに現実だった。イワンは娘の歌を聞いた。調子っぽずれで聞いた事のないような音程の外し方で、それでいて優しい鼻歌。まさか。

自分の想像にイワンは青ざめて、パシッと口元に手を当てた。

まさか、妖怪ウミボウズ……！

いやいやいや、そんなはずはない。ハゲてはなかった。

人魚か。しかし人魚にしては音痴すぎるだろう。彼女らに美声は時に漁師を死に誘うほどなのだから。

黙々と歩く王子の後ろで、リンジーとジャックがひそひそと話している。

「あの嵐の日から、イワン様の様子がおかしいわ」

「えらい大人しいやんか。どないしはったんやろ」

そしてジャックは己の職務を思い出したらしい。こういう時こそ笑わせねば、と拳を握りしめて、テトテトと主人に迫いすがつた。

「えー、ここで一発、謎かけを」

こほん、と咳払いして声を張り上げた。

「海と掛けましてー、イワン様の御心と解きますー」

ザザ、と波が鳴いた。

「その心はー」

ザザーン。

「心はー……」

ザプーン。

「……」

「オチが無いなら、謎かけなんぞするな！」

「すまへん！ ……きゃー！ー！」

放おりなげられたジャックの小さな体が軌道線を描いて海にポチャ

ンと消えた。

「ひどいわあ……」

「鈴虫の脳味噌で謎かけなんかやるからだ、あれはもっと……」  
イワンはそのまま棒立ちになった。目の前の光景に。

少し離れたその場所、娘が一人、海からあがってきた。全裸で。  
ほふくぜんしん  
匍匐前進で浜まで這った娘はそのままうつ伏せになり、そして微動だにしなくなった。

くるとイワンは身を翻した。

——あれに関わってはいけない。

頭の中の警報がそう告げる。

——あれはヤバイ。おれのサムシングを危機におとしいれた、あの女だ。

「どうされたのです、イワン様」

不審がるお付き二人の肩をがっしり抱いて、王子は足を速めた。

「いいか、振り返るな」

「は？」

「振り返れば奴がいる」

そうだ、このまま立ち去ってしまえ。

ところがどっこい。

「ちよっとっ！ 命の恩人、見捨てる気っ！？」

当の娘がガバリと身を起して怒鳴ってきた。チッとイワンは舌打ちした。

「命の恩人！？」

犬の如く反応したのはリンジーだ。イワンの手を振り切って、娘の元へ猛ダッシュで駆け付けた。

「おい、こら、リンジー！ 戻ってこい！」

主人の命令を無視して走ってゆくその様は、まるで世界選手権100m走を駆け抜けるウ○イン・ボルトのようだったと、後にジャックは語る。

「ああ、王子のお命を救っていただき、本当にありがとうございます

した！」

リンジーに抱きあげられた娘は、海からあがってきた割には元気いっばいで、生意気そうに顎を上げる。

「寒そうなご様子。こんなものでよければどうぞ」

リンジーのマントにくるまれた娘が礼を言った。

「まあ、親切なお方。どうもありがとう」

逞しい女戦士にお姫様だっこされた、華奢な赤毛の娘。その姿は何だかとってもツカ風味。

娘は安堵したのか、そのままころりと寝入ってしまった。

「寝るか！？ このシュエーションで普通、寝るか！？」

イワンのツツコミもまるで処置ナシ。

「きつと溺れて疲れていたのでしょうか。このままお城へお連れいたしましょう」

「リンジー！ もっと状況をよく見ろ！ どう考えたって不自然じゃないか、全裸の女が海で溺れて浜に打ち上げられるか！？ 干物や海草じゃねえんだ、おかしいだろう！」

「干物は打ち上げられまへん」

三人がギャーギャー言いあいしていると、女の声がした。

「どうしたのです？」

三人はびくりと肩をすくめ、おそろおそろ振り返った。イワンの母、王妃が騒いでいるイワンたちを不審に思ったのだろう。後ろには水のかけあいっこでびしょびしょになった王様もいた。

リンジーから理由を聞いた王妃の顔が曇る。

「ではその娘がイワンを助けたというのですね」

「母上、それは……」

「黙れや！」

王妃の一喝で、その場の全員が固まった。

「命の恩人見捨てるような恥知らずに育てた覚えはないわ！ その根性叩きなおしたるか、ちょっとそこの岩間に顔かせや、ああ！？」  
この王妃さま、実は貴族出身ではなく、城下で有名な「南瓜馬車」

の頭をはって<sup>ヘデ</sup>いたバリバリのヤンキー（死語）であった。

お忍びで城下に遊びに来ていた王様がゴロツキに絡まれているのを「アタイ（死語）のシマでなにぬかしてんじゃあ、いてこましたるかワレエ！」

と助けたのが縁で惚れられ、王妃になった。ちなみに腕には

「王様命 貴族上等」

の刺青が彫ってある。

セルフコントロールの甲斐あって、普段はたおやかであるが、激高すると地がでてしまう。

つまり、今現在、非常にお怒りなのだった。

「その娘はあんたが責任もって面倒見いや。捨てたりなんぞしたらマジぶっ殺すで」

「……分かりました」

「王妃ちゃん、王妃ちゃん。怒ったら皺が増えちゃうよ。イワンも反省したことだし、はいはい、カムダウンカムダウン」

王様の取りなおしに王妃がきゅっと叫んだ。

「やだ、またやっちゃった！ 王様、あたしのこと嫌いになった！？」

「そんなことないに決まっているじゃないか！ 王妃ちゃんはいつも最高だよ！」

「王様！」

「王妃ちゃん！」

せーかいのためー ふーたりはあるのー せーかいのためー ふーたりはあるのおおー♪

なんてBGM流しながらオンワールドに入ってしまった両親を尻目に、イワンは踵を返した。

絶対にあの女、追い払ってやる、と固く決意しながら。

## 抱いてくれたらいいのに

フィンネル国の第一王子、イワンの住まいは城から少し離れた小宮<sup>プチトリアン</sup>だ。小さいながらも三階建ての立派な屋敷、玄関までのアプローチには色とりどりの草花に飾られ、専用のバス、キッチンもついた10LDK。ちなみにホールは吹き抜けになっており、ロココ調の大階段が優美に存在をアピールしている。いつでもヅカごっこができるというオプシヨン付きだ。

「そんなオプシヨン、いらさないから！」  
家の主の声が聞こえてきそうである。

さて、身元不明の若い女を連れ帰ったと聞いて、この小宮の召使たちは上から下の大騒ぎになった。しかも、三階の自室に連れ込んだようである。

真っ昼間から何をする気だあの王子。てゆうかあの女素っ裸だったぞ。ちょ、王子、マジ獣<sup>けだもの</sup>！

野次馬根性を出した召使たちは押すな押すなの勢いで自室の前に集まり

「何を騒いでる、窓からほりだすぞ！」

の王子の怒鳴り声で蜘蛛の子を散らすように、一気に霧散した。

「こりゃ面白いもんが転がり込んできたねえ」

台所の主、ハンナは顔から垂れ下がるくらい大きな鉤鼻をひくつかせながら不気味に笑った。

その声を聞いた召使たちはそのまま群れを成して台所へ大移動する。ここは彼らの大切な場所だった。その中心でハンナは叫ぶ。推定年齢70とは思えない、張りのある声で。

「あんたら、命張る覚悟はあるのかい！？ あの娘っ子がここに居座るか一週間以内に出て行くか？ さあさあ張った張った、一口5ペリー（※1）だよ！！」

おおおんと盛り上がった召使たちは、老いも若きも、男も女も、次々と掛け金額を口にした。さながら魚河岸の競り市のような熱気である。

一言言いたい。

お前ら、仕事しろ、と。

さて、その頃のイワンである。ただっぴろい彼のベッドですやすや眠る少女を、脇の椅子に座って腕を組みながら忌々しげに見ていた。燃えるような紅い髪が枕に散って、それを辿れば陶磁器のような白い肌に行き着く。閉じたまぶたの裏には深海のごとく蒼い瞳が隠れている。シーツを押し上げている膨らみは男を誘うには十分だったが、しかし。

どう考えても常識をはるかに離脱した行動は、美しい容姿を崩壊するに十分なほどの破壊力を持っていた。

こんな女は見たことがない。彼を取り巻く女たちは、みな聞き訳が良く「範囲内」を楽しんでいる。マニユアル通りの恋愛を。

つまり――

「説明しよう！ 王子サマとして育てられたイワンさまのスペックは、三高（死語）のハンサムボーイ、だけど心はちよっぴりガラス仕様！ 人目のあるところでは爽やかにイイ人装っているけど、反動でわたし達おつき二人にはかなりハードなツン展開！ いつかデレることを期待して、涙を堪える日々を送っているNO！」

「つまりは人様に心を見せないチキン野郎ってことだネ☆ 想定外の人間はブルって追い出したくなるんだYO！」

イワンはたいそう無礼な女戦士と道化師の襟首を引っつかみ、そのまま無言で窓際までひきずっていった。

「うそですうそですごめんなさい！！！」

「ちよっといひすぎましたもうしません！！！」

謝る2人を反動つけて思い切り外に放り投げる。



「落ちてるよ!？」

「誰か受け止めて!」

窓の外から叫び声がした後、しばらくしてぽちゃんぽちゃん、と水音が聞こえた。

再びどっかりと椅子に腰を下ろしたタイミングで、娘が小さく呻きながら目を覚ました。

文句の一つでも言おうかと覗き込んだイワンは、思わず声を失う。あまりにも澄んだ蒼い瞳に飲み込まれたような気がした。透き通ったウォーターブルーの中に沈んでゆく錯覚すら抱かせる。なぜか切ない感情がこみ上げてきた瞬間、娘の手が動いた。

「え!？」

気が付いたらベッドに引きずり込まれ、組み敷かれていた。

「こんにちは、王子さま」

娘は無邪気な顔でにっこりと笑う。

「さあ、交尾をしましょう」

そのまま問答無用とばかりにぶっちゅー、とキスをかましてきた。イワンは抗い身をよじったが、体にのしかかられ、両手首はがっちりホルドされている。

ジタバタともだえる王子、抵抗叶わず。

「……てまでまで！ いっぺん離れろ!」

「じらしプレイね、分かったわ!」

「違うッ!」

やっと唇を開放されたイワンは息も絶え絶えである。

「いったい何を考えているんだ、君は！ はしたない女だな!」

「あら、だって」

娘はかわいらしく首をかしげた。

「繋がってみたいと分かりあえないじゃない」

「分からなくていい！ むしろ君とは一生分かり合えないままでいたい!」

そのまま渾身の力をこめてベッドから這い出ようとする。娘は力づくで阻もうとする。第三者からみれば、くんずほぐれずのあられもない格好になっていたその時。

「イワン。あの子、大丈b――…」

第三者が来てしまった――！ しかも自分の父親！！

全裸の娘とベッドの中で、アンビリーバボーな姿を晒している我が息子をみた王は、しばらくドアを開けたままの格好でフリーズしていたが、

「グッドラック！ マイサン！！」

ビシッと親指を立てて、そのまま退散してしまった。

後日イワンが語ったところによると、その時の「分かるよ、同輩」みたいな目が非常にムカついたそうである。

娘っこはそれから一時間後に部屋から追い出すことに成功したが、ちゃっかり二階の客室に居ついたようである。

とにもかくにも、「浜で拾った娘」アリーアはこの日から小宮に居座ることになった。

※1 1ペリーは百円に該当します。一口500円は結構リスクいですね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1857t/>

---

たとえばこんな人魚異伝

2011年8月24日11時42分発行